

選評

佐伯 一麦（作家・仙台文学館館長）

月は四季を通して私たちの生活と密接な関わりを持つと同時に、名月など秋を代表する景物である。また、月齢によつてその姿を変える様は、古今東西、死と再生の象徴とされてきた。

応募作の中で多かった内容は、子供の頃に見た月の思い出や、月にまつわる身内や友人の死について書かれたものだった。それから、英語教師時代の夏目漱石が「love you」を「月がきれいですね」と訳したというエピソードにまつわる話が数篇あり、興を惹かれた。

月にまつわる人生上の一大事が描かれた作品もいくつもあった。出来事の切実さは強く伝わって来たものの、月の光がイメージにとどまっていたり、「その日は満月だった」と書かれるだけで、月についての観察や描写、考察がないものは、月がテーマのエッセイとしては、やや物足りない、と感じざるを得なかった。

最優秀賞の「26番目の月」は、文章の語句の重なりなどが気になったが、もともと月について具体的に踏み込んで書いている点を高く評価した。三日月と反対側が光り、新月へと細っていく、東の空に浮かぶ二十六夜の月のことが、作者の体験や観察を通してよく描かれていた。不眠症にかかって有明の月を見ていたり、小学校の教員として理科を教えていたという職業柄、科学的にも月を捉えており、へちょうど夜明けの光で消えてゆく26番目の月を、父の最後の姿に重ね合わせる想念には、深く感じ入らされた。ちなみに、江戸時代には二十六夜待ちという風習があり、陰暦正月と七月の二十六日の夜には、月光の中に弥陀・観音・勢至の三尊が現れると言い伝えられ、月の出るのを待つて拝むことが盛んに行われたという。

優秀賞の「タマちゃんと満月」は、子育てにまつわる月の話。幼稚園児の息子が言い出す「我儘になった時はタマちゃんぐるんだよ」という、タマちゃんという存在そのものの発想が面白く、文章もヴィヴィッドだった。狼男などでも知られる満月が持っている不思議な力、人間や生きものたちに及ぼす作用を、子供も感じ取っているのだろう。

もう一つの優秀賞の「武蔵野」は、月と薄をモチーフにした「武蔵野」という着物の柄から想起された、お月見の薄とりを巡る思い出が描かれている。実家の隣に住んでいた「第二の母」のようなおばちゃんとの薄とりを母が断ったことと、その後の病気の因縁など、おばちゃんとの出来事をきっかけとして他者への想像力が働いていた。最後には、真夜中になって雲間から覗いた今年の十五夜の月が、「天高くに小さく、そして眩しいほどの白く丸い月が冴え冴えと光っていた」と素直な文章でしっかりと描写されている。

惜しくも受賞には洩れたが、印象に残った作品はほかにも多かった。月に白く照らされた滑走路のような道を駆ける「月に鳴く虫」、山で月明かりに助けられた出来事を描いた「月夜の散歩」、満月におねしょの思い出が蘇る「お月さまは知っている」、産婆さんだったばあちゃんの姿が印象的な「月の帳面」、月にまつわる数奇な運命を描いた「妻は月よりの使者」、母との意外性のあるエピソードが鮮やかな「お月さん、電気ついてる」、ゲーテについて語った中学校の国語教師を端正な文章で綴った「月の光」など……。

また、若い世代からの応募作では、幼稚園児と祖父との月を巡るやりとりを掌篇小説風に綴った「ありあけのつき」、月への考察に独自性のある「形を変えて」、太宰の短篇の一節に出てくる月を目をとめた「潜む怠惰」を興味深く読んだ。

これからも、月を友として暮らしていただけますよう。